

■パインボウルの見どころ

北海道と東北の大学王者が雌雄を決する北日本大学アメリカンフットボール王座決定戦・第33回パインボウルが23日、仙台市の元気フィールド仙台（仙台市新田東総合運動場）で行われる。北海学園大（2年ぶり3度目）と東北大学（9年連続30度目）の対戦で、両校の顔合わせは2年ぶり。前回は14-38で敗れた北海学園大が雪辱に燃えている。

パインボウルは2011年の第24回から、全日本大学選手権（甲子園ボウル）の東日本代表校決定戦準決勝となり、勝者が関東大学リーグの代表と甲子園切符を争ってきた。今年はコロナウイルス対策で同選手権が中止となったため、試合は北海道と東北代表のプライドをかけた一戦となる。北海道学生選手権の優勝決定戦、東北学生連盟トーナメントの決勝の両校の戦いぶりから、今年のパインボウルの見どころを探ってみよう。

北海学園大は優勝決定戦で、ライバルの北海道大を21-14で退けて、2年ぶり7度目の北海道王者に輝いた。QBとWRが若返り、伝統のパス攻撃の仕上がりが注目されたが、強力ラインを生かしたランと効果的なパスが光った一戦となった。

ランプレーの主役は30回のキャリアで127ヤードを走り、2TDのRB阿部龍太郎（4年、室蘭栄高）。我慢比べとなった前半は攻撃ラインのブロックを生かして着実にゲインを重ね、第2Qの先制TDパスにつなげた、第3Qにはパスでつかんだ好機にダイブTD、第4Qも相手ミスで得たゴール前での得点機に、力強い中央突破で決勝点となる、この日2本目のTDを奪った。本間航史主将（4年、札幌東高）ら経験豊富な4年生ラインの強力ブロックも好走を後押しした。

パスでは新エースのWR佐藤玲太（3年、札幌光星高）が要所で見せた。第2Q、自陣からの攻撃で相手DBとの競り合いの中で捕球すると、スピードを生かしてそのままエンドゾーンへ。66ヤードの先制TDでチームを勢いづけた。第3Qにも25ヤードのパス捕球で敵陣3ヤードまで迫り、阿部のTDランをお膳立てした。好捕で、今季から先発するQB小笠原文瑠（2年、札幌・北海高）をもり立てた。

守備チームも堅実なプレーを見せた。DL坂本大弥（4年、札幌開成高）やDL藤田丈慈（2年、札幌手稲高）らが圧力をかけてQBサックやファンブルを誘い、LB竹内佑至（4年、旭川明成高）がハードタックルを浴びせた。DBも長谷部悠（4年、札幌・北海高）が2試合連続でインターセプトを決めるなど動きの良さを見せた。

一方、コロナウイルス対策のためにリーグ戦を取りやめ、トーナメントで競った今年の東北学生連盟。東北大は1回戦で山形大に66-0、準決勝は秋田大に24-0、決勝も岩手大を36-0で下し、リーグ9連覇を果たした。

決勝の岩手大戦は、自慢の攻撃ラインが相手守備を圧倒した。主将のG渥美誠也（4年）、T城内貴央（4年）、C三浦綾介（4年）、G前田悠樹（3年）、T稲葉隆之助（2年）が、平均身長181センチ、平均体重102キロのサイズとスピードで守備ラインを押し込み、第2QにはエースRB石尾涉次郎（3年）とRB吉田翔一（3年）が相次いでTDランを決めた。石尾は第4Qにも2本のTDランを奪い、ラン攻撃の威力を見せつけた。

パス攻撃も、QB藤田盛治（3年）がWR本田千理（3年）、TE久野優人（3年）、WR水出拓真（2年）に投げ分け、第3Qには本田がTDレシーブを見せた。

守備もラインの圧力とLBの守備範囲の広さが光った。DL吉田大活（4年）、DL白木寛慈（3年）、DL佐藤倫太郎（2年）が相手OLの動きを封じ、雨谷伶司（4年）、山田恵太郎（4年）、清水悠斗（3年）、草島立樹（2年）のLB4人が次々とハードタックルを浴びせた。DBも林佑樹（4年）、甲地拓登（3年）、品川風樹（2年）がそろってインターセプトを決めるなど隙がない。

北海学園大は過去2度のパインボウルでは、いずれも東北大に苦杯をなめているが、今年は3度目の正直。まずはライン勝負で東北大を圧倒し、伝家の宝刀のパスで北海道王者の実力をたっぷり見せつけてほしい。